

タイトル	みんな生きている		
氏名	雙田 茂樹		
学校名	堺市立北八下小学校		
担当教科	保健体育		
実践教科	総合	時間数	2時間～3時間
対象生徒学年	5年 (3年～6年生・中学生)	対象人数	58人(240人+中学生)

カリキュラム案

(1) 実践の目的

さまざまな国の人々や同年代の子どもたちの様子、また、世界が直面している問題に触れ、将来、どのように自分や家族、世界がなったらいいかを考え機会とする。また、そのためには、今、何ができるかも考え、自分の生き方を深めていくことを目的とする。

(2) 授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1限目 テーマ:日本・ドバイ・タンザニアから世界を知る。 ねらい:さまざまなことを知り、さまざまな事について、問題意識を持つ。	(1) Google Earthとフォトランゲージを用いて、日本・ドバイ・タンザニアを見比べていく。見比べることで、世界にはさまざまな国があることを学んでいく。 (2) フォトランゲージと『比べてわかる世界地図』を用いて、世界のさまざまな国の現状について問題意識を持ち、意見交流を行う。	Google Earth ドバイ・タンザニアで収集した写真等 (比べてわかる世界地図)
2限目 テーマ:同世代の子ども達がどのような生活をしているのか知る。 ねらい:自分の将来、家族の将来、世界の将来をイメージし、その実現のために今何ができるか考え、深めていく。	(1) フォトランゲージを用いてタンザニアの小学校の様子を知り、資料から世界の小学校と子どもの様子を学ぶ。 (2) 「ぼく・わたし」「かぞく」「せかい」について、「将来、こうゆうふうになったらいいな」そうなるためには、「自分たちに何ができるか?」を考える。	タンザニアで収集した写真 (比べてわかる世界地図) (データマップ)

授業実践の詳細

① Google Earthと写真から日本とドバイ、2つの国の人々の様子を知ろう。

(⇒世界にはお金持ちの国があることを知る。)



- ・日本とドバイの町や自然などの様子を比べ、ドバイがどういった国なのかを考える。

- ・ドバイの空港に売られている商品からさらにドバイについて考える。

(BMW 金銀の携帯・約300万円の酒)

- ・日本の商品がドバイでたくさん売られていることを知る。(カメラ TV Wii DS Xbox など)

② Google Earthと写真から日本とタンザニア、2つの国の人々の様子を知ろう。

(⇒世界には貧しい国があることを知る。)



- ・日本とタンザニアの町や村、自然などの様子を比べ、タンザニアがどういった国なのかを考える。

- ・タンザニアの町に日本のモノがあふれているのを知る。

- ・どうして、お金持ちの国にも、貧しい国にも日本のモノがあふれているのかを考える。

③ 日本のモノがタンザニアにあふれている理由について考える。

(⇒理由の1つに、日本は、貧しい国にさまざまな形で支援していることを知る。)



- ・日本は、さまざまな形でタンザニアを支援していることを知る。

（信号やその周辺の道路
小学校の先生
職業訓練学校の先生
水省、安全な水源確保など）



④もし、日本の支援がなかったら、どうなっていたのか考える。



- ・給水施設がなかった以前は、どのようにして、水を得ていたのか考える。
- ・世界には、8秒に1人の子どもが、汚れた水が原因で死んでいることを知る。
(比べてわかる世界地図)

⑤水問題以外に、どのようなことで困っているか考える。

- ・栄養不足（飢餓）………毎日、5秒に1人が餓死している。そのうち75%は子どもたちだ。
- ・平均寿命……………日本の平均寿命は世界1位だ。タンザニアで40～59歳、隣のザンビアは、33歳だ。
- ・ストリートチルドレン ……数1千万人の子どもが路上で暮らしている。
- ・児童労働……………世界中の子どもの6人に1人が、危険な仕事、売春などの労働を強制されている。
- ・貧困、所得……………1日1ドル以下で暮らす人は11億人、世界人口の6人に1人
- ・難民……………2000万人を超える難民が世界中で暮らしている。
- ・5歳未満児童死亡率 ……アフリカの多くの国では、4人に1人が5歳まで生きられない。

(比べてわかる世界地図)

⑥グループ学習 今までの写真や動画を参考に、問題意識を持つ。

飽食な日本の写真と飢餓に苦しむ子どもの写真を見て、自分はどう思ったか。グループで話し合わせ、発表させる。

⑦問題意識をさらに持たせる。



子どもたちが、何かしないといけないと考えるようになったところで、左の写真を見せる。先生も、何かしないといけないという気持ちを持っていたのに、また、食べ物に困っている人がたくさんいるという現実がアフリカにあるということを知っていたのにタンザニアで多量の残飯を出してしまったことを子どもに伝える。

⑧タンザニアの子どもたちから、世界の小学校の様子を知る。



- ・どうして教室にこんなに多くの子どもがいるのか考える。→先生や教室の数が限られているから。
- ・どうして教室で年齢の違う子どもたちが同じ授業を受けているのか考える。→小さかったころ学校に行けなくて、ようやく行けるようになったから。
- ・教科書はどうしているのか考える。
→教科書は先生しかもっていない。また、世界で見てみると、子どもが教科書を借りている国、買っている国、ただでもらっている国など、さまざまであることを知る。(比べてわかる世界地図)
- ・どうしてそんなに楽しく授業を受けているか考える。
→算数は好きですかの質問に（日本43%・マレーシア95%・モロッコ87%）の子どもが好きと答えていることを知り、勉強について考えてみる。

- ・やっと村にできる予定の建設中の学校の写真と孤児院の写真を見ながら、世界の子どもの7人に1人は学校へ行っていないことを知る。
- ・学校に行けないと、どういったことで困るか考える。
→世界には文字を読めないひとは10億人いることを知る。タンザニアで20～40%の人が文字を読めない。また、アフリカには、60%以上の人人が文字を読めない国もあることを知る。

⑨日本に比べて、生活に困っているにもかかわらず、どうしてこんなに楽しく、一生懸命に頑張ることができるのか考える。

⑩タンザニアだけでなく、世界の子どもたちは、どのような生活をしているのかを知る。

- (⇒日本で生活している自分の生活はどういったモノなのか見つめる。)
- 「学校へ行きたいよ。でも、母さんがダメだって言うんだ」(メキシコ)
 - 「小学校を卒業したらお坊さんになるんだ。」(タイ)
 - 「6歳の時から家を離れて、学校の近くに子どもたちで住んでいるよ。」(ペルー)
 - 「朝日が昇ったら仕事が始まるよ。今度、2か月ぶりに家族に会えるんだ。でも、10分しか会えないんだ。」(ケニア)

など計12名の子どものDVDより

⑪幸せについて考える。

- ・日本とブータンを例にとり、幸せとは何か考える。

日本	ブータン
・世界で第2位の豊かな国	・経済的に貧しい国
・町には、洋服、食べ物など、電子機器等、モノがあふれている。	・日本の80分の1という経済力(1人あたりのGDP)
・幸せ度は33位	・国民の45%が「非常に幸せ」と答え、「幸せ」と答えた人と合わせると97%が幸せと答える国
・自殺する人は、年間3万人以上	
・自殺する人は、世界で10番目	(NHKデータマップ)

⑫『私・家族』について、『将来、どうなったらしい』また、そのためには、『今、何ができるか』『10年後、何ができるか』考えてみる。

⑬少なからず、我々のせいで苦しんでいる人たちがいることを知った上で、『世界』について、『将来、どうなったらしい』また、そのためには、『今、何ができるか』『10年後、何ができるか』考えてみる。

将来、こうゆうふうになつたらいいいな		
ぼく、私	・夢に向かってがんばっている人 ・夢を叶える事のできる人 ・楽しい仲間と共に楽しめる人 ・サッカーの監督	
かぞく	いつも笑って過ごすことのできる家族	
せかい	貧富の差が少ない世界 笑顔の絶えない世界	
自分たちになにができるかな？		
	今 (具体的)	10年後
ぼく、私	先生とサッカーの勉強	サッカーの監督になって…
かぞく	休日のお手伝い	パパになって、子供と遊びまくる。
せかい	世界の事を勉強して伝える	サッカーの監督になって…



- ・世界中には、世界中の人が十分に食べるだけの食事があるというのに、食べ物がなくて、5秒に1人の人が命を失っている。
- ・穀物と肉、同じ一人分の食事でも、肉を食べると、実は、穀物8人分の食事を食べていることになる。
- ・必要以上の食事

【生徒の反応】

子どもたちは、自分の知らない現実が世界中にあり、興味と驚きをもって話を聞くことができていた。また、世界の子どもたちのさまざまな生き方を知ったことで、自分の生活や生き方に対する考えを深めることができたようにと思う。最後に書かせた作文の所々に、世界や未来を具体的にイメージした言葉が記述されており、今回の授業を経験することで、視野が広がり、自分の生き方を見つめることができるようになったのではないかと考える。

授業実践を通しての所感・反省点・今後の改善策

世界の現状を知ることはすごく大切で、さまざまな国の子供たちの生き方を知ることで、子どもたちは、自分の生活や生き方に活かすことができたので、授業を行ってよかったと思う。

動画などを駆使して、出来る限り、イメージしやすい授業を行うように心がけたが、アフリカなど、世界が抱える現実問題については、刺激が強いと考えたため、飢餓などの現状を映した写真や動画はあえて控えた。結果、こどもの5秒に1人が餓死している現実に対して、親身になって考えることができた児童と、他人事のように考えていた児童がいた。

その後、子供たちは、アフガニスタンやカンボジアで取り組みをされている方の授業を受けた。児童たちは、その話に対しても、釘を突くように話を聞いていた。地雷などの話や写真は、すこし過激な内容もあったように感じられたが、子供たちは、その現実をしっかりと受け入れることができていた。『刺激的過ぎて、トラウマにならないか』と心配していたが、子供たちはしっかりと受け入れることができた。5秒に1人が餓死している現実について他人事のようにしていた児童も、地雷によって足を失った子どもの写真を見たとき、真剣に話を聞くことができていた。

今後、授業を行っていく上で、どこまでリアルな内容で行っていくのがよいか熟慮していく必要があると考えた。リアルな内容のほうが、親身になって考えることができる。しかし、やはり、トラウマにならないかどうか非常に心配である。

今回の授業は、世界の全体像と、自分はどう生きていくかにスポットを当てた授業だったので、次は、もう少し、個々の問題にスポットを当てて実践していければよいと考える。

●参考資料

- 『くらべてわかる世界地図1巻～8巻』 大月書店
 「NHK 地球データマップ」 ニッポン放送出版協会
 「戦争が終わっても」 株式会社ポプラ社
 「できるぞ！NGO活動」 株式会社おるぶ出版